

## 『そこで、命の主に目を向ける』 ヨハネ11:17-27

11:17 さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていた。

11:18 ベタニヤはエルサレムに近く、二十五丁ばかり離れたところにあった。

11:19 大ぜいのユダヤ人が、その兄弟のことで、マルタとマリヤとを慰めようとしてきていた。

11:20 マルタはイエスがこられたと聞いて、出迎えに行ったが、マリヤは家ですわっていた。

11:21 マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。

11:22 しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています」。

11:23 イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。

11:24 マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。

11:25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

11:26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

11:27 マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。

## ●序論

信仰の告白。救い主の「死」しかも処刑による「死」を語り、その上で三日目の「よみがえり」を語る。そしてそれをかけがえのないものとして信じると告白する。

ここでわかることは、

- ①クリスチャンが、2000年前の出来事を、今を生きる自分にとってかけがえのない救いの出来事として受けとめているということ。
- ②その出来事に、自分の「死」を重ね、また、自分も「よみがえる（復活する）」ということを感じているということです。

この信仰の告白は、今、自分に生きる力を与えてくれる信仰の言葉なのです。

人の「死」という現実をごまかさず、よみがえりを明確に語る言葉なのです。

そういう意味で、今日、イエスさまが友人ラザロの死の現場に来て、その家族のひとりマルタに、最初の最初にはっきりと言われた言葉が印象的です。

：23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」(新改訳)

この言葉を聞くことが、今日の結論に当たります。

その死の現場で、そこで、命の主に向き合う…ということなのです。

## ●本論

## I. 「死」という現実の中で

聖書は、「死」という現実がないかのように描きません。そこには確かに人は死ぬこと、そこに別離の悲しみや、家族の喪失感、また無念があることもそのまま語ります。

:18 ベタニヤはエルサレムに近く、二十五丁ばかり離れたところにあった。

:19 大ぜいのユダヤ人が、その兄弟のことで、マルタとマリヤとを慰めようとしてきていた。

ひとりの人の死がもたらす深い悲しみが、そこにありました。

:20 マルタはイエスがこられたと聞いて、出迎えに行ったが、マリヤは家ですわっていた。

:21 マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。

マルタはその悲しみの現実の中で、弔問客の対応をし、イエスさまに対してもおいでになったと聞けばすぐ立って出て行き、気丈にしっかりとふるまい、しっかりとした言葉でイエスさまに向けたことが想像できます。

しかしそんな落ち着きを装う彼女にとっても口惜しかったのは、イエスさまがラザロが死ぬ前にいてくださったならば、死ぬことにはならなかつたということでした。

死という現実はだれにも訪れます。しかしその現実の中で、そこで私たちは命の主を目を向ける、その時がここにある。わたしたちにもある。そのことを覚えていきましょう。

そういう意味で、キリスト教の葬儀は、このイエスさまを迎えての礼拝です。

それはイエスを迎えた礼拝であると同時に、わたしたちの悲しみや痛み、口惜しさにも寄り添い耳を傾け聞いてくださる方を迎えているのだということです。

## Ⅱ. 「知っています」の限界

非難めいた言葉をイエスさまに訴えた後、マルタは続けてこうも語りました。

:22 しかし、あなたがどんなことをお願いになっても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています」。

彼女は、イエスさまのことをよく知っていました。親しかったからです。

だから、兄弟ラザロはもう死んでしまった…という現実の中でも、「わたしは”今でも”存じています」と、はっきり言うのです。

そんな彼女にイエスさまは言われました。

:23 イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。

マルタはそれにも即答しています。

:24 マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。

彼女の答えは正解でした。彼女は知っていたのです。ただその知っていることが、イエスさまの言葉を跳ね返しているように感じる印象与えます。

「そんなことわかっている」とも聞こえてしまうその言葉には、イエスさまを寄せ付けけない…印象。そこに、気丈にふるまうマルタの心の壁を感じます。

どんなに落ち着いてふるまっても、実は心は” いっぱいっぱい”、それが身内の死を迎えた時の現実だったと思います。

ここで大切なことは、この会話はそれで終わらなかつたということです。

イエスさまは、その返事をうけとめてくださいました。

### Ⅲ. 「信じる」ことの祝福

:25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

:26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

イエスさまは、気丈にふるまい、自分はわかっている…と主張する、彼女の視線を、ご自分に向けようと、語りだしておられます。

「あなたが知っているという、そのよみがえりは、実はわたし自身なんだよ」、  
「わたしが命そのもので、命を与える者で、わたしを信じて、わたしにつながることで、たとえ死んでも生きることができるのだ」と語ってくださっているのです。

愛する兄弟の死という現実のショックが、マルタの心の壁となっていました。

その死の現実を受け入れようとふるまうために、イエスさまに対しても「わたしは知っています」「わたしはわかっています」と答えているのです。

そんな彼女に、イエスさまは、「わたしに目を向けて、わたしにつながって得ることのできる命と希望を知ってほしいと、頭で「知っていること」の狭い世界から、イエスさまを「信じること」で広がる命の世界へと連れ出してくださっているのです。

そのことを、この地上で知るためにイエスさまは、あのラザロを生き返らせる奇跡をこのあとになさいます。

それは人が経験で、科学で、知り得ることのできる範囲を大きく超える、わたしたちを造られた神さま由来の命の世界がわかるように示された奇跡なのです。

…ただ、それだけじゃない。

イエスさまの言葉に注目しましょう。

「また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」

それは、「死んで終わり」ではない、命の世界が広がりの経験です。

AGバイブルアカデミーという聖書の学びのテキストのタイトル「あなたの新しい命」。

その学びの冒頭にこう書いてあります。

青虫が蝶へと成長する過程で何が起こるのでしょうか？ 小さな種はどのようにして太い樹木へと成長していくのでしょうか。生き物には生まれながらの生命が働いているので、驚くべき変化を生じさせます。

ただイエスさまを信じてクリスチャンとなったあなたの内側には、今、霊的ないのちが働いています。…(それはあなたを) イエスの似た姿へと変えていくのです。

だから、こう言われていることを大切にしたいのです。

「あなたはこれを信じるか」と。

「信じるだけでいいのですか？」と問われます。

はいその通りです。そこに命の扉は開かれます。

「信じます」と答えることが大切なのは、わたしたちの側で、このことについて「知っています」とは言えないからです。

ただ、信頼してイエスさまにつながっていき、「信じます」と答えていくとき、自分の頭のキャパシティで制限されない、神さまの圧倒的に豊かないのちの祝福がわ

たしたちの内に流れ込んでくるのです。

覚えていますかイエスさまは、御自身を羊飼いでたとえられた時、こう言われました。

10:10 …わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。

### ●おわりに

わたしは信じています。このイエスさまの語る命の言葉は、死の現場で働き証しされていったように、どんな時代のどんな状況下でも、どんな人をも覆い癒し、つくり変えることのできるほどの圧倒的恵みであると。

改めて、あの死の現実の悲しみに、気丈さと知識によって抗うマルタに対して、またわたしたちにも向けて語られているイエスさまの言葉を見てください。

:25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

:26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

それにマリヤは答えました。

:27 マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子であると信じております」。

その「はい、信じます」という言葉は、どこまで理解していたのか…と、後の時代を生きるわたしたちは、評価しがたります。でもそんな必要はないのです。

思い起こしてください。不十分さ、足りなさあつての、わたしたちの信仰の始まりではありませんでしたか？

大切なのは、それを聞いてくださった、受けとめてくださっている、恵み深いイエスさまがそこにいてくださっているということなのです。

わたしは申し上げます。安心してください。「はい、信じます」と答える、皆さんをイエスさまは、その絶大な恵みをもって覆い、祝福してくださるから、大丈夫ですよ！と。